

十字架、教会に輝きて教会救わる

牧師 山本 護

受難節が始まった最初の主日、鋳物の薪ストーブに火を入れて温まるまで時間がかかるので早めに教会へ来た。寒さはまだ厳しいけれども朝がいつそう明るくなり、八ヶ岳教会という文字の背後で十字架が輝いている。看板材は木目が印象的な無垢の樺、彫り抜かれた十字架の輝きに不意打ちを食らって、しばらく立ち尽くしていました。



1913年(大正2)のちょうど今頃、内村鑑三は静岡で『世を救う唯一の力』と題した説教をしています。「実に万事ことごとく破壊されし後に残るのはただ一つの十字架なり。十字架の輝く家庭は救われ、十字架、村に輝けば村、国に輝けば国救わる。使徒パウロに輝きて、彼の偉大は何びとも比すべからず」。

「十字架、八ヶ岳教会に輝きてこの教会救わる」だろうか。内村が提唱した無教会は、宣教師に主導されて教派争いをする教会を批判し、聖書への集中を求めた20世紀のプロテスタント運動でした。内村の強烈な人格と正鵠を射た福音で、諸教派の教会は覚醒させられ、十字架の輝きによって改めて救われたのではないのでしょうか。

この日、内村鑑三が引いた聖書箇所はパウロの手紙。「そは、われ、イエス・キリストと彼の十字架につけられし事のほかは、なんじらの中にありて何をも知るまじと、意(こころ)を定めればなり(コリント前書 2:2)」。ここから内村は語ります。「われ今日罪を犯さば主の十字架を仰がん。明日また罪を犯さば明日また十字架を仰がん。幾たび、いかなる罪を犯すとも、またかくせんのみ。罪のゆえに主より離れず、主の愛は無限にして、罪によりてわれらを捨てたもうことは決してなし」。

「主の愛は無限」、私たちは己が「罪のゆえに主より離れない」。十字架という主の愛と私たちの罪は八ヶ岳教会でも語られています。内村の熱弁は百年以上も経つ印刷物でありながら心の底を揺さぶります。聖書に依拠しながらも、文言の解釈や内容の理解ではなく、ただ十字架の輝きに救いの希望を示す。

内村鑑三の証言には命を賭した迫力があります。「無学不文の翁媪(おきなおうな)も、少しく学を修めしわれらも、毫も異なることなく、ひとしく主の十字架を仰ぐことによりてのみ救わるべし」。パウロにとっても、内村にとっても、私たちにとっても、毫も異なることなく輝く主の十字架。そんな十字架を受難節礼拝の朝に仰ぎました。Ω